

岡山大学 キャンパス・アジアプログラム セッション

共通善の実現と東アジア型グローバル教養教育

小野真由美

岡山大学キャンパスアジア・プログラム

本セッションでは、岡山大学が平成23年度より実施するキャンパスアジア事業「東アジアの共通善を追求する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」による教育および人材育成の取り組みについて報告した。本プログラムでは、岡山大学、中国の吉林大学、韓国の成均館大学校とのパートナーシップに基づき、「共通善」の実現を理念とする日中韓の共同教育開発によって、学生の高度なモビリティと多言語を用いた協働学習が可能となっている。日中韓の学生の活発な交流のために、長期派遣留学、短期派遣留学をはじめ、ナノバイオ系サマースクール・オータムスクール、留学体験ワークショップ等、プログラムの多様化を全学体制で推進している。共同教育開発の特徴的取組として、日中韓の3国共通教科書の編纂や、「地域をキャンパスに」をコンセプトとした地域社会に根差したCBL (Community Based Learning) 型授業やPBL (Problem Based Learning) 型授業、さらに、先駆的取組として多言語を用いたアクティブラーニング型授業の開発を行ってきた。

本セッションでは、学生による成果報告をもとに、高等教育における東アジア型グローバル教養教育のモデル構築に向けて、その可能性と課題について検討した。

本セッションの趣旨

本セッションは、岡山大学キャンパスアジア・プログラムが実施する日中韓の共同教育の成果として、留学を通じた共同学習が東アジアの共通善の実現に向けてどのような意義を持つのかを学生の経験から検証することを目的とした。特に、日中韓の3大学が相互に学生の派遣・受入を行う留学制度、および2014年度後期に新たに開設した必修科目「共通善教育多言語セミナー」での共同学習の成果に基づいている。共通善教育多言語セミナーは、キャンパスアジア・プログラムが受け入れた中国、韓国からの留学生と岡山大学の日本人学生、とくに長期留学から帰国し高度な語学力を身に付けた学生が、事後学習として東アジアの共通善の実現に向けて相互理解を深めること、および東アジアの中核的人材として現実的な社会問題の解決のために、実践知として共通善の概念がどのように応用可能であるか議論を通じて追究することを目的としている。主要言語を設定せず多言語(日本語、中国語、韓国語、英語)を用いて議論する、アクティブラーニング型の科目であることが特徴となっている。

本セッションではまず、冒頭に趣旨説明を行い、続いて3組(大西、金・徳永、木村・時)の学生発表ののち、質疑応答の時間を設けた。一組目の発表者である大西彩奈(岡山文学部行動科学科2年生)は、キャンパス・アジアプログラム2014年度長期派遣生として、2013年2月末より一年間韓国の成均館大学校に留学した。その経験から、長期派遣留学を通じた東アジアの教養教育の在り方について検討した。

2組目の発表者は、成均館大学校文科大学東洋哲学科博士課程に在籍する金東夙(2014年度長期派遣生として10月から2015年9月末までの一年間、岡山大学大学院社会文化研究科に留学中)と、岡山大学教育学部2年生の徳永百合(岡山大学キャンパスアジア・プログラムが実施した2012年度中韓留学体験ワークショップ派遣生および2013年度成均館大学長期派遣生)が、日韓における平和の概念に関する比較検討を行った。

3組目の発表は、吉林大学文学院修士課程に在籍する時佳希(2014年度長期派遣生として10月から2014年3月末までの半年間、岡山大学大学院社会文化研究科に留学)と岡山大学文学部人文学科4年生の木村崇志(キャンパス・アジアプログラム2012年度中韓ワークショップ派遣生および2013年度吉林大学長期派遣生、キャンパスアジア学生サークル代表)が日本と中国の歴史認識に関する比較検討を行った。以下、3組の学生発表の内容を紹介する。

「留学で培う教養力」(大西彩奈)

大西は、キャンパス・アジアプログラムによる韓国の成均館大学校への一年間の長期留学の成果から、教養教育としての留学の意義および留学を通じて身に付いた教養について自己の経験に基づい

て検討を行った。

キャンパスアジアの基礎理念である「東アジアの共通善」に関しては、「固有文化」の側面に注目した。留学中には、ソウルにある古宮や博物館に足を運び、実際に韓国文化を体感できた。東アジアの宮殿というのは一見似ているようにみえるが、デザイン、機能、建築のもととなった独自の思想が存在し、建築物ひとつにしても、日本と韓国の差異を知るのは非常に興味深かった。また、長期休暇には、地方を旅行した。ソウルの外に出れば、地方ごとの特徴があり、様々な韓国文化を知ることができた。ソウルの中に留まり、ソウルの街を知ったとしても、それは韓国の一部にすぎない。地方都市に行けば、ソウルとは全く違う風景が広がっている。例えば、済州島のあちらこちらには、他の地方にはない「トルハルバン」という石像があり、これは街の入口などに立てられ守護神と呪術的な宗教機能を兼ね備えている。固有文化を学ぶということは、東アジアのお互いの理解を深める第一歩であり、共存する相手に関して知っておくべき教養の基礎である。自分が体験し、学んだ韓国の固有文化の素晴らしさを、自分の言葉で広く伝えることもまた必要であると感じた。

留学中は、韓国語に加え、韓国の文化、東アジアの古典・近代文学を学んだ。専攻科目が決まる前の段階で留学に行けたことで、分野にとらわれない幅広い学習に取り組むことができた。留学後期には、英語で開講されている心理学のオンライン授業を受講した。韓国で心理学を学んで一番意味があったと思うのは、日本語に頼らず、自分の外国語能力で学習を進めていくことに挑戦できたことである。英語で論文を読む力を培ったことは、次の目標である大学院進学へのステップとなった。

岡山大学での1年間と、韓国留学での1年間、合わせて2年間の教養教育により、基礎的な教養を身に付けることができた。韓国への留学を通して「共通善」としての固有文化を学び、異文化を持つ人とお互いの文化を理解しあうことが相手との距離を縮めることを知った。相互理解を深めるためには、人と関わることが重要であり、語学力の向上により幅広い人間関係の構築が可能となる。また、現地での生活を通して、先入観にとらわれない幅広い視点から教養力を培うことで、今後の専門科目の学習も豊かなものになると考える。

「共通善からみる平和とは」(徳永百合、金東夙)

徳永と金は、共通の利益すなわち「共通善」となる平和の概念を取り上げ、漢字文化圏としての東アジアの人々が共生するために必要な教養・知識について検討した。日中韓三国は「漢字」という文明を共有し、「漢字文化圏」を形成した。現代においても東アジアには共通の単語が多いが、国によって漢字語の概念は完全には一致しない。このような点を見ごせれば、相互理解をする際に誤解が生じる可能性がある。そこで、漢字文化圏において元来共有していた漢字語を再び相互理解の有効な手段とできないかと考え、「共通善から見る平和とは」というテーマのもと、東アジアの共通善である漢字の中でも、特に明治時代に作られた翻訳語である「平和」という漢字語を例にその可能性について検討した。

「平和」という漢字語をみることのできる最も古い資料である『左伝』には、「平和」は音楽の旋律が調和しているという意味で使われている。その後中世から現代にかけてその意味に変化がみられたが、両者の共通点として、現在でも「平和」という漢字語の中には『左伝』の中での「調和」というニュアンスが残っていることがわかる。明治時代に「peace」という外来語が伝わり、漢字文化圏である日韓が持っていた「調和」というニュアンスに近い「平和」の概念は、西洋の「peace」という概念が入ったことで「戦争がない」という具体的な状態の意味に拡張したと考えられる。現在の日韓の「平和」の意味には大きな相違がない上、一般的に思い浮かべる平和に対するイメージとして「青い空を飛ぶ鳩」があり、両者の平和の概念の共通認識が指摘できる。

また、憲法における平和について日本と韓国とを比較すると、日本国憲法の中では、「peace」の概念が強く反映されており、「平和」が戦争の対義語的な意味で使用されているのに対し、韓国の憲法では、「平和的統一」という単語が多く使用され、北朝鮮との休戦状態にある韓国の情勢を反映していることが分かる。つまり、憲法の中での「平和」の概念には相違がみられる。

以上、日韓における「平和」について比較検討すると、共通点と同様に相違点も指摘できる。漢字語は漢字文化圏において有効なツールである一方、そのニュアンスの違いが、時には歴史問題や社会的・政治的な問題に大きな影響を与え、各国の関係悪化の原因になりかねないと、東アジアに生きる私たちは教養として身に付けておかなければならない。また、東アジアを包括する漢字文化圏という共通基盤をもつためには、元来共有していた「調和」という意味での平和に立ち返ることも可能であ

る。今後の東アジアの関係を考える際、「調和」というキーワードを取り入れていくことは非常に意義のあることだと考える。

「グローバル化と歴史の共通認識」(木村崇志、時佳希)

木村と時は、「東アジアにおける歴史の共通認識」、とりわけ日本と中国の歴史認識について考察した。発表者はともに専門として歴史学を学んでいるため、共通善教育多言語セミナーで扱った日中の歴史教科書の問題に興味を持った。本発表では、社会的、文化的そして経済的な結び付きを強める東アジアの中で、依然として解決に至らない歴史認識をめぐる対立を、教育面と歴史論争の面から考察し、いかにして共通の認識を持ち、東アジアという共同体の中で生きるかということについての自分たちなりの結論を述べた。

現在の東アジアは、文化的、経済的にはますます緊密になる一方で、政治的には対立しているという状況にある。その主たる原因は歴史認識をめぐる問題であり、東アジアがともに発展していくためには、不可避な問題であるといえる。このような課題を我々自身の問題として考える題材として、日中の歴史教科書を取り上げ、その内容を比較検討することは、歴史教育の側面から東アジアにおける歴史の共通認識について考える上で示唆に富んでいる。

教育の目的は、国家をさらに発展させる国民を育成することであり、その上で、歴史教育が担う役割は非常に重要である。その意味において、歴史教育には建国理念やそれに基づく教育理念が反映されており、同時に政治体制や主義・思想の影響も受けやすい。建国理念が異なれば、当然、歴史教育も異なるのである。

現在の歴史認識問題は、こうした様々な影響を受けた歴史教育によって形成された認識が両国民の間で異なることがその原因として指摘できる。日本の教科書は、客観的に歴史的事実を扱うが、太平洋戦争に関して「侵略」という側面の記述が欠如している。また、中国の教科書における歴史とは、「中華民族」共通の歴史を意味し、「中華民族」に危機をもたらす存在として日本人が語られる。こうした両国民の歴史認識のずれが、この問題の解決を難しくする大きな要因となっている。

たしかに、自国民の育成という枠組みに立てば、それは当然のことであるが、様々なものがグローバル化している現在において、そうした自国の認識だけでは不十分であり、歴史認識問題で言えば、「侵略—被侵略」あるいは「加害者—被害者」という構図を越えた、東アジア共通の認識の枠組みでとらえなければならない。つまり、東アジア共通の認識を確立するのは、人道主義という立場であり、その枠組みこそが東アジアの共通善といえよう。

まとめ：東アジア型グローバル教養教育の可能性と課題

岡山大学キャンパスアジア・プログラムが提案する「東アジア型グローバル教養教育」という言葉は、その用語の指す内容と妥当性について、今後更なる検討を要する課題であることはいうまでもない。しかし、人間社会において普遍的な「平和」という概念が、東アジアの社会においてイメージ、法、国際情勢、社会文化的背景、あるいは日常的な用法から、どのように規定されているのかを考えると、戦争をめぐる歴史がどのように認識され、学習されるのかを共通善という視点から考察することは、当該地域の人材育成の基礎となる教養教育であるといえる。「東アジアの共通善」という概念の哲学的な追究を、研究者の視点ではなく教養教育の現場からみると、「共通善」という一見「難しい」概念の導入自体が、学生のなかの潜在的な共通善意識を引き出すしかけとなっていることが見て取れる。また、学生の高度なモビリティが実現する動的な教室の創出は、東アジアの相互理解を促進する可能性をもった学びの空間を提供することを意味する。動的な学びの空間を学生のモビリティによって創出することは、高等教育機関が担うべき役割であり、東アジア型グローバル教養教育に不可欠な条件である。